

# 磐城毎日新聞

（昭和六年二月十八日）  
第一版 第二版 第三版 第四版 第五版 第六版  
（本紙は、昭和六年二月十八日、月曜日に創刊）  
（本紙は、昭和六年二月十八日、月曜日に創刊）



## 磐城文化聯盟の提唱

高木 稻水

磐城地方には磐城地方の特有な文化がある。交通機関の發達や教育の普及に依つて地方色といふものが、だんだんに失はれて來つた。しかし、各個人にとつて個性がないといふ事は結局他に服従されてゐるといふことである。偉人傑士とは個性のはつきりした人といふ事だ。ドイツ國民性の特異性はドイツ民族の強さである。地方文化の特色が、我々には他郷に行つて、平市



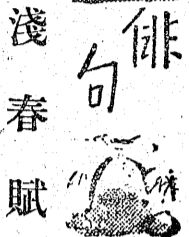
## 藝學

國民の教育を外にしては、一億一心の生産力擴充も結局十分出來ないのである。（桐原）

## 九官鳥の死

五十嵐雄二

雌雄の方はこの鳥の兄弟分である。雌雄が知れないやうに私は全く判らない。だが、これは確かに雌です。と、この九官鳥は男の人は大嫌ひで男の人が來るとキヤクといひ叫び聲に似た地聲を出して非常に騒ぐ、鳥畜生の所為としてしまふことさへあつた。これに引換へ女の方には至極愛嬌が良く「オヤウー」「オカケ下サイ」から驚の眞似まで演じてお目にかけるといつた形で、中々評判が良かったかうしたことから同性相愛、異性相引の宇宙の法則からかう鑑定されたといふことである。



## 俳句

早春の沼風寒く片洗ふ  
早春の沼波さやく燈に對ふ  
早春や海へ傾く麥の青  
春淺く湯の岳風まきまきより  
ふるさは柳芽もせず淺き春

## 假寐の夢

長谷川 正男

假寐の夢に出て來たのは、故郷に歸りたいといふ子の母の腕に抱かれて、唄ふ軍歌の一節を想ひ出したかと思ひ見せ、眼元の露も消えて行く坊やと叫ぶ我が聲に、夢からはなれ鏡を執りきつと睨んだ戰場に、ねぐらとられた鳥が飛ぶ

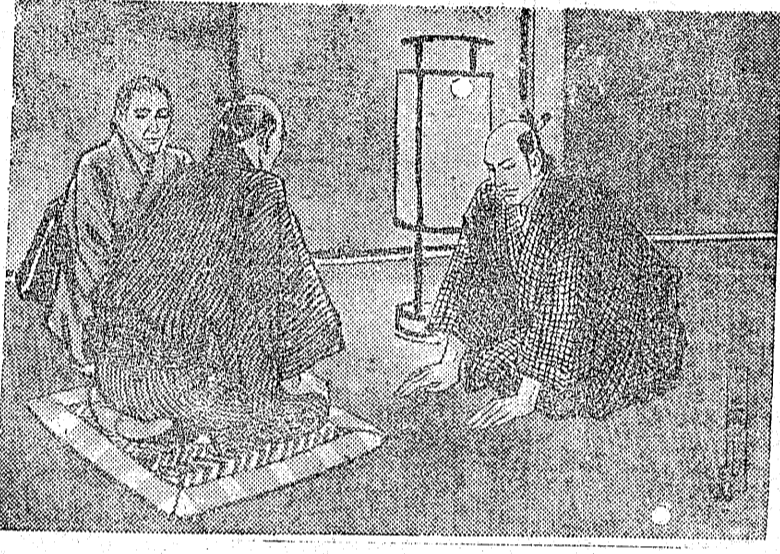
## 談話續



異説赤穂浪士

城川 若燕

金三郎再び江戸へ  
「ウー、俺も金三郎が家をやつて貰ひたいと思つてゐるんだ」  
「オヤア、お父さん、後で金三郎に聞いておくれな」  
「聞いてみよう」  
と夜になるのを待ち兼ねて、夢床の永蔵は金三郎を奥に呼んで、  
「さて金三郎、お前に少し頼みたい事がある、夫れは外でもない、昨夜もさよなら二人で話したんだが、お前が来てくれてからといふものは店へは昔に増した筈、こんな嬉しい事は無い、と仰るが、本人は永蔵といふ、俺があの時、十五、六年前に急病で死んでしまつた、夫れから此の年に



なつても誰一人死水を取つて呉れ手が無い、どうだらう、物は相談だがお前が俺の養子になつて愛床のあとを引受けてくれまいか、ナ、俺だつて只遊んでゐようと思つて、ない手足の動ける内は働かして見ようから」  
「何分お願ひ致します」  
と、金三郎は置いて愛床の永蔵はハハハと涙をこぼし、  
「武士は己れを知るも、己れに命を捨て、女は己れを愛するもの、これに武家奉公をせよ、世話をしたのが鐵砲洲の淺野内匠頭のお屋敷、こゝへ足輕として住み込むことになつた昔の足輕は鐵砲を打つ事と棒を使ふことが出来れば一人

### 病室増築、手術室完備

## 産科 醫學博士 五十嵐雄二

平市新川町「電話三六九番」

### 妊産婦入院隨意

## 木村病院

平市南町「電話三〇九番」

### 根本産科醫院

平市南町「電話三四番」

### 根本莊次郎 根本貞雄

### 一平

平市一丁目

## 朝日

肉の御用命は 三三三屋

牛も豚も優良品の自慢

### 野村外科

小名栗町古港 元津村屋

### 吸入用酸素純度99%

## 關内藥局

平市四丁目「電話四〇番」

### 防空暗幕

### マルトモ食堂

平市四丁目「電話二三番」

### 磁氣應用治療

## 野内商會

平市南町「電話一一番」

### 味の司 トンカツ

平三田小島

### 小賣指定

## 野内商會

平市南町「電話一一番」

### 菅波醫院

四倉町本町「電話六三番」

